
空白

秋茄子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白

【Nコード】

N3961A

【作者名】

秋茄子

【あらすじ】

作家サークル言 葉のお題小説です。女子高生の茉莉とどこか空虚なイメージの男、神崎の話。

いつだったか、先輩が言っていた。その瞬間には、何故か必ず相手と目が合ってしまうのだと…。

あの人が『柚本』に来て、二週間がたった。この二階建ての小さな下宿には管理人も合わせて全部で7人が住んでいる。彼の部屋は二階の奥。私は母と2人で一番玄関に近い一階の部屋を使っている。この下宿で二人で一部屋を使っているのは私と母くらいだ。あとはみな学生で、一人親元を離れてここに来ている。

一人だけ、学校にも仕事にも行っているようでない人がいるけれど。

私は母に命じられ、ラップのかかった器を持って二階の奥の部屋の前にいた。彼は滅多に食事に降りてこない、だからよく母は、私に届けさせる。

私はトントンと軽く襖を叩く。すぐに目の前の襖が開いた。部屋の窓が開いていて、風が私のセーラー服を揺らした。色の白い、綺麗な造作の男が顔を出す。茶色い瞳は悲しげで、ただど作り物のようでもあった。

歳は今年で23歳だと言うが、別段童顔でもないのに幼く見える。彼は真夏だと言うのに白い長袖のシャツを着ていた。

「神崎さん。寝てたんですか？」

どこか眠そうに見える神崎にそう問うと、神崎は首を横に振った。

首を横に振ったものの、俺は自分が起きていたのかどうか自信がな

かった。

目は開いていたが、思考は別の次元にあつたような気がする。茶色い瞳は悲しげで、ただど作り物のようでもあつた。

ノックの音でふと我に返り、卓袱台の上に広げてある物を見ないように白い襖に目を向け、客人を迎えに出てみると管理人の娘の柚本茉莉だつた。この親子は母一人子一人で本人たちも大変だろくに、俺を心配して、何かと世話を焼いてくれる。

「ご飯持ってきたんです」

そう言つて茉莉は微笑み、器を軽く持ち上げた。俺は頭を下げ、入るように目で促した。

茉莉はスリッパを脱いで部屋に入り、卓の上に器を置いた。そして、卓の上のものに興味を示す。

「これ、免許証？」

俺は片付けておかなかつた自分の失敗を苦く思いながら頷いた。茉莉はそれをまじまじと見る。

「あれ？これ車の免許証じゃない。すごい神崎さん、電車運転できるんだ」

俺は曖昧に笑つて誤魔化した。

茉莉はそれ以上は何も言わず、俺が先刻外して免許の横に置いておいたピアスを見た。

「神崎さんピアスしてるの？」

そう問うと、彼はまた曖昧に笑つた。そして私の手から取り上げたピアスを、左耳に着けてしまった。

ピアスは緑がかつた青い小さな石が付いていた。

「大切な物なんですか？」

その質問には泣きそうな笑みが帰ってきた。

「ある人からもらつた……いや、預かつてる物なんだ」

預かり物を普通耳につけるかな？と疑問に思つたが、私は別の事を

聞いた。

「彼女ですか？」

不躰かな？とも思ったが、あんまり切なそうなので、訊いてみた。

というより、神崎が誰かと特別な関係を持っている、というのが、意外に思えたのだ。

彼は首を横に振った。

「いや、でも、決して忘れられない人だよ」

私はあの石が神崎を縛っているのだと思った。

あの石を付けていないと、神崎はきつと己の中の空洞に吞まれてしまふのだ。

そんな風に思ったのは、神崎がいつも、どこか感情の欠落した空っぽの微笑を浮かべているから。

私はもう何も言わずに、彼の部屋から出た。

あの部屋には空白が多い。余白ではなく、空白、と感じるのは、部屋主自身がどこか空っぽな感じがするからかもしれない。

開けっ放しの押し入れの中には、一組の布団と衣類の入った3段のカラーボックスしかなく、部屋には卓袱台だけ、あとは小さなテレビ。

三号室の住人も、23歳で大学生の男だが、部屋は大量の服と壁のプラグに先端を突き刺したままのコードが床でうねり、ポスターが壁を隠している。他の学生の部屋も似た様なものだ。学生かそうでないかでこれほどまでに違うものだろうか？

茉莉が帰ってから、俺は免許をかたずけた。耳のピアスをいじると血が出た。

何も考えられなくなる。セーラー服の少女がふと脳裏をよぎったが、すぐに遠退いた。

次に見えたのは宙に投げ出された細い体と、電車内の通路に叩きつけられた青石のピアス。

「おはようございます」
可燃ゴミの袋を持った後ろ姿に声をかける。なんとなく不思議な感じだった。

私があんまりじろじろ見るからだろうか、神崎は居心地悪そうに苦笑する。

私は慌てて笑い返した。

だって神崎からは生活している匂いがしないのだ。その神崎がゴミ袋を持っているのは、なんだかひどくおかしかった。

ゴミ袋が似合わない。

そう言うと、神崎は戸惑う。その仕草が、やはり幼く見える。

「そうかな…」

「はい。あ…」

路地の向こうに、私は友達を見つけて、神崎の方に振り向いて笑う。
「じゃあ、いつてきます」

神崎も微笑んだ。

今日も茉莉は俺の部屋へやってきた。学校の調理実習で焼いたのだというクッキーを持っていた。一緒に持って来たコーヒーに、角砂糖を3コも入れ、ミルクを入れて甘くしていた。クッキーも甘くて、彼女は甘い物が好きなのかなと思った。俺は甘い物は苦手だが、おいしいと言うと、彼女は笑った。

茉莉が帰った後、俺はカレンダーを見た。明日は日曜日だった。その隣りにはめったに着ない黒の正装が掛かっていた。クリーニングから帰ってきたばかりだ。

俺は電車の運転をしていた。その子は、どこか茉莉に似ていた。同じセーラー服で、大きな目で、明るくて、純粹そうな子だった。毎

朝俺に挨拶をしてくれた。あの日、彼女は一緒にいた男になにか叫んでいた。

もうすぐ駅に着くところだったが、一応注意をしようとした時だった。

「もういい！」

そう叫んで彼女はピアスを引き千切って床に投げつけた。耳から流れた血が、彼女の制服を汚し、人の少ない車内に静寂がおとずれた。いつのまにか駅に着いていて、俺は電車を止めた。

電車が止まったとたん、彼女は早足に電車を降り、連れらしい男は別の車両に移動した。俺は黙って、床に落ちたピアスを拾った。

彼女はそれをいつもつけていた。

この暑いのに黒の正装を身につけ出かける神崎を見つけ、私は首をかしげた。喪服のようだ。

なんとなく気になって、私は彼の後をつけた。

彼は途中の花屋で白い花を買い、それを片手に歩いて行く。バスにも乗らず、随分長い距離を歩き、昼近くになってようやく足を止めた。

そこは墓地だった。彼はまた足を進める。

私は一瞬ためらった。しかし彼の後に続く。

「あれ？」

私は周りをキョロキョロと見渡した。

「神崎さん…？」

この広い墓地で、私は彼を見失った。慌てて探す。

周囲に気を配りながら走り回っていると、黒い後姿が見つかった。

私は慌てて身を隠す。彼は一つの墓の前で静かに目を閉じ、手を合わせていた。

ごめん、と声が聞こえた。

私は思わず足を踏み出す。その砂利を踏む音と、それは同時だった。彼が言った。

「俺があなたを殺した」

彼の耳にはあのピアスが光っていた。

しばらくして、俺の目は彼女を捕らえた。人の波を押し退けて、立ち去った彼女がそこにいた。

押し退けられた人々は、迷惑そうに彼女を睨み、ギョツとしたように彼女を見て、すぐに目を逸らす。周囲の人たちは目を逸らしたまま彼女を避けて行く。彼女の制服の肩は、耳から落ちた血液で汚れていた。

悲しそうに線路を見ていた。

やがてアナウンスが流れる。電車がゆっくり発進する。

そのとき、ジツとたたずんでいた彼女が動いた。

いつか、先輩が言っていた。

『その瞬間』には必ず相手と目が合うものなのだ、と…。

彼女が線路に身を投げた。その瞬間、彼女と俺の視線は確かに絡み合った。電車の巨体が彼女を引き裂いた。

俺は慌てて電車を止めた。

そのあとは、腰が抜けてへたりこんでいた。

何も、考えられなかった…

音のした方を見ると、茉莉がいた。驚いたように目を見開いて、ジツとこちらを見ている。

「茉莉、ちゃん…?」

俺の声に彼女は肩を震わせる。

今日は日曜なので、白いワンピースを着ていた。

「神崎さん…今…」

怯えながらも素直にそう訊く彼女に、俺は少し笑った。

「何を聞いたの？」

問うと、彼女は墓の1つを見て言った。

「その人を、殺したって……」

逃げようとしないう彼女に笑いかけ、話をしたいと思った。あの子に似た彼女に話し、謝ることで、許されたつもりになりたかったのかもしれない。それはずるいような気がした。けれど、やっと呪縛が解かれる気がして、自分の中の虚が満たされる気がして、それに縋った。

神崎の話に驚きつつ、私はホツとしていた。彼が人を殺したと言った意味を知ることができたからだ。

あなたのせいじゃない。そう言っただけだからだ。

私はその手をそつととった。

神崎は泣いていた。

静かに涙を流しながら微笑む彼の耳で、青い石が光った。優しく笑うように、ちらちらと、陽光を反射して。

神崎の中に長い間あった空白が埋まるのを、私は感じていた。

(後書き)

どうして、こんなに無理やり感が…
自分はお題に沿って書いてるつもりが、後で読み返したら、とても無理やりな感じがします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3961a/>

空白

2011年10月3日02時44分発行